

衝動傾向と職業適性に関する一研究

岡 村 一 成

1. は じ め に

ハンガリーの精神医学者であるリポット・ソンディ (Lipót Szondi) は、1944年に『運命分析 (Schicksalsanalyse)』を発表し、1947年に『衝動要求の実験的診断 (Experimentelle Triebdiagnostik)』を発表して、かれのユニークな理論とテスト法とを紹介したのである。

ソンディの理論は、「人間の根源に衝動とこうものがあり、それが人間の意識的・無意識的な精神過程や行動を規定し、人間の生涯の運命づけをしている。したがって、多数の可能な行動のうちから、なにかを選択する（たとえば、恋愛、友情、職業などの選択を行なう）場合、その選択は決して偶然的なものではない。」ということから展開していくのである。

ソンディは、人間の根源にある衝動 (Triebe) というものは、精神医学における代表的な精神異常の遺伝疾患群と密接な関係にあると想定し、次の4つの衝動ベクターをあげたのである。

- (1) S ベクター：性衝動
- (2) P ベクター：発作衝動、激発衝動
- (3) Sch ベクター：自我衝動
- (4) C ベクター：接触衝動

そして、これら4つの精神病理学的遺伝圏のおおのは、2つの臨床的にも遺伝学的にも区別できる現象形態を示すものであるから、8つの特別な衝動欲求を区別することができるとした。この8つの衝動欲求（因子）が、衝動生活の根本的なものになるというのである。8つの衝動因子と衝動ベクターとの関係を示すと次のようになる。

- s ベクター { h 因子 (同性愛)
s 因子 (サディズム)
- p ベクター { e 因子 (てんかん)
hy 因子 (ヒスリテー)
- Sch ベクター { k 因子 (緊張病型分裂病)
p 因子 (妄想病型分裂病)
- c ベクター { d 因子 (うつ病)
m 因子 (躁病)

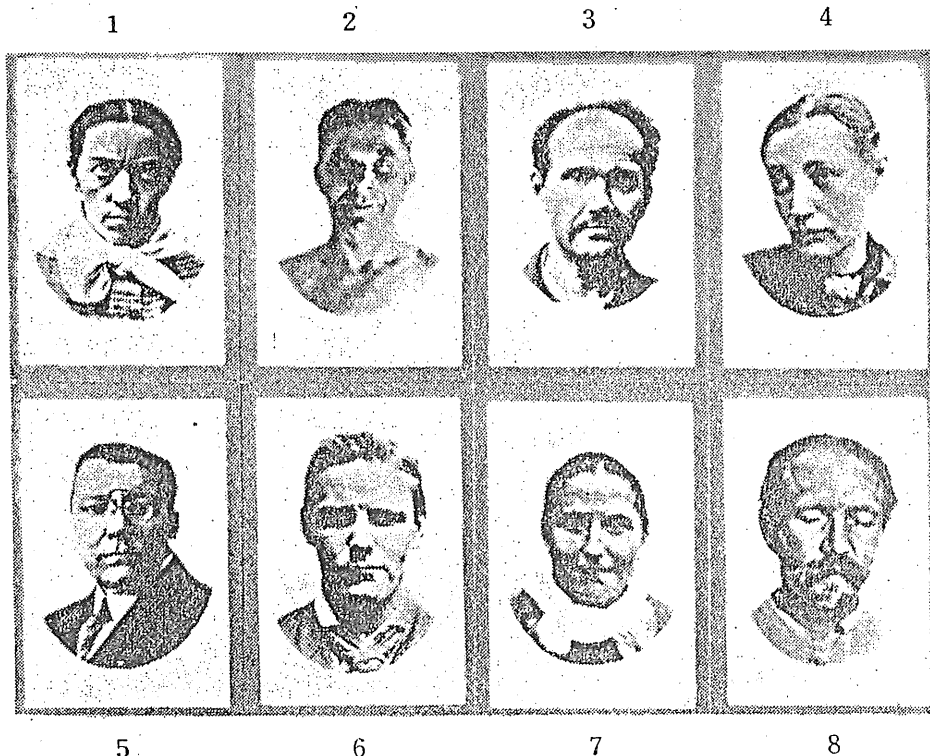


写真 1 ソンディ・テスト図版 第1組

このように1つのヴェクターにはそれぞれ2つの対立した因子がみられる。この2つの対立した傾向が自我の適応という過程において、抑圧されているか、社会化されているか、または昇華されていて、2つのうち1つだけが外的行動として顕現するのである。だから8つの衝動欲求（因子）はさらに16の衝動傾向に分化するのである。

ソンディは以上のような理論にたって、新しい診断法を試みたのである。この方法は、衝動因子と密接な関係にある精神病患者の写真を見せ、それを好きな写真と嫌いな写真とに選択させるのである。そして、この選択反応を分析することによって、人格などの診断がなされると主張したのである。

従来このテストは、精神病理学や犯罪学の領域など



写真 2 ソンディスト図版 第2組



写真 3 ソンディスト図版 第3組

において多く用いられてきたものである。職業人に対するテスト応用研究は、1939～1941年に F.Mêrei が数千人の労働者について研究したが、ブタペストの爆撃の際に資料のすべてを失ってしまった。その後、1953年に H.Dreyer は「衝動構造と職業適性、鉦山に於ける衝動診断学的研究」によって、職業相談にこの

テストを応用することが有効であることを示したのである。*わが国においては、1958年に鈴木清、西野証治によって「ソンディ・テストについて」の研究が発表（第25回応心大会）された。これは6群の職業婦人、洋裁従事者、公務員、タイピスト、看護婦、ファッションモデル、売春婦）を用いて集団処理法の検討を行



写真 4 ソンディ・テスト図版 第4組



写真 5 ソンディ・テスト図版 第5組

* L. szondi 著、佐竹隆三訳「実験衝動診断法」P. 368

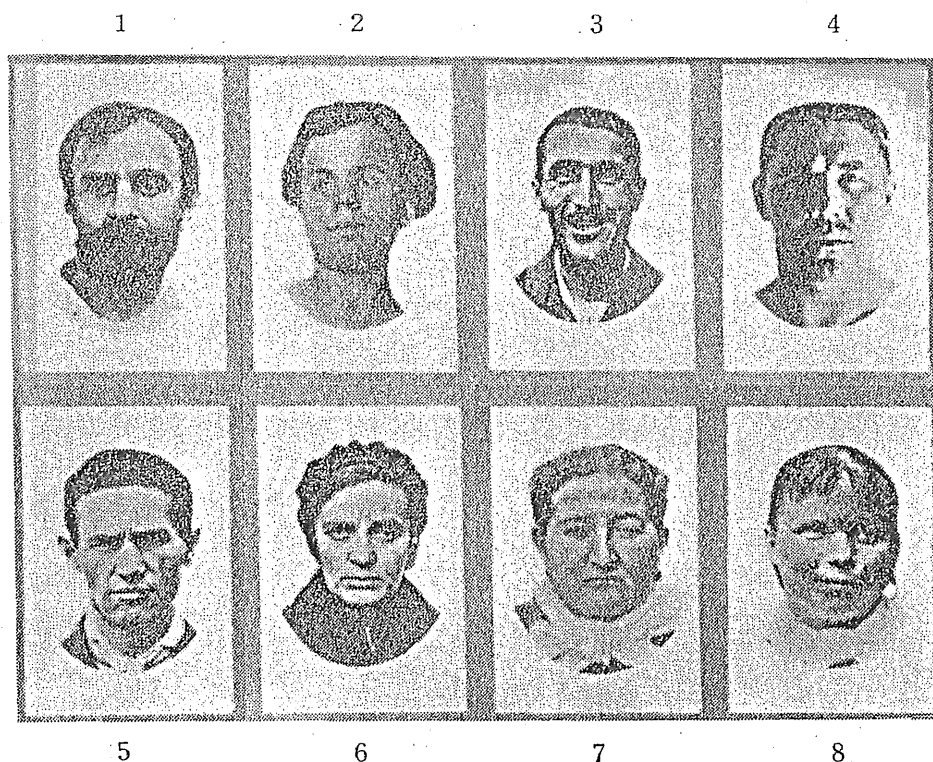


写真 6 ソンディ・テスト図版 第6組

なったものである。以上のように、現在では「ソンディ・テスト」の職業人に対する応用研究は少ないのである。

2. 目的

ソンディが主張するように、職業の選択が運命づけられているとするならば、当然、職業分野においても、特徴ある衝動構造が存在するはずである。したがって、各職種 of 衝動構造というものがみいだせれば、従来の職業適性検査とは別の角度から、「職業適性」をみいだす一方法とすることができよう。そして、職業相談において有効な指示をあたえる資料となるであろう。

そこでこの研究では、機械、電気、運輸装置（自動車整備）板金溶接、鋳造鍛造、木工建築の7職種について検討し、衝動傾向と職業部門との関連を追求しようとするものである。

3. 方法

〔1〕 テスト材料

テスト材料は衝動因子を代表すると考えられる、同性愛 (h)、サディズム (s)、てんかん (e)、ヒステリー (hy)、緊張病 (k)、妄想病 (p)、うつ病 (d)、躁病 (m) の8人の顔の写真が6組、計48枚の人物写真からなっている。これらの人物写真が意味する衝動

表 1 人物写真の意味する衝動因子

写真番号 組	1	2	3	4	5	6	7	8
I	k	s	q	d	h	e	m	hy
II	hy	m	e	h	d	p	s	k
III	h	e	s	m	k	d	hy	p
IV	p	hy	d	k	m	s	e	h
V	e	d	hy	p	s	k	h	m
VI	m	h	k	s	p	hy	d	e

因子について示すと、写真1～写真6および表1の通りである。

〔2〕 インストラクション

ここにいろいろな顔をした人物の写真が8枚ずつ6組（I組～VI組）並んでいます。それぞれの組のなかから好きな顔を2枚ずつ、嫌いな顔を2枚ずつ、自由に選んでください。どれを選ぶのが正しくて、どれを選んだら誤りであるということはありません。好き嫌いとはまったくあなたの個人的な第1印象できめてさしつかえありません。あまりむずかしく考えないで、なるべくはやく選んでください。

もしも好きな顔が選びにくかったならば、「気が合いそうな顔」あるいは「親しみが持てそうな顔」を選んでください。また、嫌いな顔が選びにくかったなら

ば、「気が合いそうもない顔」、あるいは「親しみの持てそうもない顔」を選んでください。どれもみな好きだとか、どれもみな嫌いだとかいう場合には、そのうちでも比較的嫌いな顔を選んでください。

〔3〕 被験者

職業訓練大学校学生（2, 3, 4 年生）

機械科 17名

第1電気科・第2電気科 50名

運輸装置科 25名

板金溶接科 25名

鋳造鍛造科 20名

木工建築科 25名

塗装科 25名

日本大学理工学部機械科学生 33名

S測定器製作会社（電気技術者）50名

T工作所（木工熟練者）18名

S業所（旋盤熟練者）6名

4. 結果と考察

〔1〕 衝動プロフィールからみた結果

個々人の結果は衝動プロフィールによって表わされる。プロフィールの構成は、各衝動因子につき、それぞれ好きとして選ばれた数、嫌いとして選ばれた数だけ、小さい正方形をぬりつぶす。好きの数は、中心線より上に赤鉛筆で、嫌いの数は、中心線より下に青鉛筆でぬりつぶすのが普通である。

さて、各職種別に各衝動因子の平均反応数をみると、第2表～第8表のようになる。また、これを四捨五入し、おおざっぱな平均プロフィールを描くと、図1に示すようになる。

機械科は、+m因子（3.00）、-hy因子（2.58）、-k因子（2.06）、-s因子（2.02）に反応が多く、+k因子（0.27）、-m因子（0.82）、+s因子（0.92）に反応が少ない。

電気科は、+m因子（2.52）、-hy因子（2.44）、-s因子（2.08）、+h因子（2.04）に反応が多く、-m因子（0.84）、-p因子（0.88）に反応が多く、因子反応が少ない。

運輸装置科は、+m因子（3.12）、-s因子（3.40）、+p因子（2.28）、-hy因子（2.28）に反応が多く、-m因子（0.68）、+k因子（0.72）、-p因子（0.80）に反応が少ない。

板金溶接科は、+m因子（2.92）、-m因子（2.56）、-hy因子（2.52）に反応が多く、-m因子（0.56）、

表 2 機械科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		1.98	0.92	1.12	1.90	0.27	1.80	1.34	3.00
-		1.06	2.02	1.48	2.58	2.06	0.98	1.00	0.82

表 3 電気科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		2.04	1.10	1.52	1.08	1.02	1.66	1.06	2.52
-		1.14	2.08	1.58	2.44	1.96	0.88	1.08	0.84

表 4 運輸装置科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		1.24	1.24	1.28	1.04	0.72	2.28	1.08	3.12
-		1.32	2.40	1.32	2.28	1.96	0.90	1.24	0.68

表 5 板金溶接科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		1.48	1.28	1.36	0.88	1.08	1.96	1.04	2.92
-		0.92	1.64	1.32	2.52	2.56	1.20	1.28	0.56

表 6 鋳造鍛造科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		1.80	1.10	1.35	1.05	1.25	1.60	0.95	2.90
-		0.8	2.15	1.35	2.60	2.15	0.95	1.20	0.75

表 7 木工建築科の平均反応数

反応	因子	S		P		Sch		C	
		h	s	e	hy	k	p	d	m
+		1.72	1.48	1.24	1.00	1.00	1.76	1.12	2.68
-		1.40	1.88	1.60	2.76	1.92	0.72	0.84	0.88

S	P	Sch	C
h s e hy k p d m.			
h s e hy k p d m			
S	P	Sch	C

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

— 102 —

表 10 電気（熟練）の平均反応数

反応	ベクトル 因子		S		P		Sch		C	
	h	s	e	hy	k	p	d	m		
+	2.12	1.04	1.54	0.74	0.84	1.52	0.92	3.28		
-	1.14	1.70	1.34	2.48	2.26	0.98	1.30	0.80		

表 11 木工（熟練）の平均反応数

反応	ベクトル 因子		S		P		Sch		C	
	h	s	e	hy	k	p	d	m		
+	2.61	1.39	1.11	0.78	1.22	1.17	1.33	2.39		
-	0.89	1.78	1.94	2.33	1.67	1.44	1.00	0.94		

表 12 職 種 別 因 子 選 択 反 応

単位＝%

ベ ク ター	因子	反応	機 械	電 気	運輸装置	板金溶接	鋳造鍛造	木工建築	塗 装	機械(熟)	電気(熟)	木工(熟)
S	h	+	50	54	28	36	45	40	40	67	46	66
		－	20	20	36	12	15	24	12	33	16	6
		±	10	10	0	16	5	12	16	0	14	6
		0	20	16	36	36	35	24	32	0	24	22
	s	+	8	8	16	24	20	20	20	17	18	22
		－	54	48	44	36	45	28	56	17	36	33
		±	12	22	28	12	15	28	4	17	10	17
		0	26	22	12	28	20	24	20	49	36	28
P	e	+	16	20	20	16	25	20	20	0	24	22
		－	28	28	28	20	25	28	12	50	22	39
		±	18	32	20	24	15	12	24	33	22	28
		0	38	20	32	40	35	40	44	17	32	11
	hy	+	4	8	8	12	5	8	8	0	6	6
		－	76	56	64	68	70	64	64	33	72	72
		±	6	22	8	12	20	12	20	50	8	6
		0	14	14	20	8	5	16	8	17	14	16
Sch	k	+	14	8	4	4	5	20	8	0	8	28
		－	44	48	60	72	55	40	60	33	64	33
		±	20	22	12	16	30	8	4	0	6	17
		0	22	22	24	8	10	32	28	67	22	22
	p	+	50	38	76	56	45	56	44	17	38	28
		－	16	14	8	16	25	20	24	49	12	33
		±	8	10	4	16	10	0	16	17	10	17
		0	26	38	12	12	20	24	16	17	40	22
C	d	+	34	26	28	16	20	24	16	49	22	39
		－	16	22	20	36	40	16	24	17	32	16
		±	6	6	4	4	0	0	16	17	6	6
		0	44	46	48	44	40	60	44	17	40	39
	m	+	76	72	88	84	85	72	92	66	84	72
		－	4	6	0	0	0	4	4	0	10	16
		±	14	8	12	8	10	16	4	17	6	6
		0	6	14	0	8	5	8	0	17	0	6
N			50	50	25	25	20	25	25	6	50	18

-hy因子 (2.48), +h因子 (2.12) に反応が多く, +hy因子 (0.74), -m因子 (0.80), +k因子 (0.84), +d因子 (0.92), -p因子 (0.98) に反応が少ない。この反応は電気科専攻の学生とわりあい似ている。

木工の熟練者は, +h因子 (2.61), +m因子 (2.39), -hy因子 (2.33) に反応が多く, -hy因子 (0.78), -h因子 (0.89), -m因子 (0.94) に反応が少ない。この反応は木工建築科専攻の学生とやや似ているところもあるが, 必ずしも似ているとはいえない。

各科 (各職種) 共通していることは, +m因子 (古い物, 人に執着する傾向, 口唇愛など) と -hy因子 (遠慮的傾向, 臆病, かくれたい欲求など) に反応が多いことである。

〔2〕 4 選択反応型からみた結果

因子反応は, 選択の方向 (好き・嫌い) およびその数によって, (+), (-), (0), (±) の4つの反応型に分けられ, それぞれ, 心理学的に意味づけられるのである。

＋反応 : ある因子について2つ以上の好きの選択がなされ, 好きの選択が嫌いの選択の2倍以上となる場合である。すなわち, 次のような場合である。

好きの数	6	5	5	4	4	3	3	2	2
嫌いの数	0	1	0	1	0	1	0	1	0

この場合は, 被検者が写真の人物への同一化を示したものであり, そのような欲求を受容したことを示すのである。

－反応 : ある因子について2つ以上の嫌いの選択がなされ, 嫌いの選択が好きの選択の2倍以上となる場合である。ちょうど＋反応の場合と逆の関係になるものである。

この場合は, 拒否・抑圧あるいは昇華された傾向を表現しているのである。

±反応 : ある因子について好きおよび嫌いの選択反応が2つ以上であり, かつ, 一方が他方の2倍をこえることのない場合である。

すなわち, 次のような場合である。

好きの数	2	3	4	2	2
嫌いの数	2	2	2	3	4

この場合は, 一方で同一化を欲し, 他方ではそれを欲しないというもので, 両欲求への葛藤状態にあることを示すのである。

0 反応 : ある因子について好き嫌いの反応がそれぞれ1つ以内で, 次のような場合である。

好きの数	0	1	0	1
嫌いの数	0	0	1	1

この場合は, 写真の人物との同一化も拒否も全然なく, 全く客観的症候状態にあることを示すのである。

また, +・-の傾向の特にいちじるしいものは欲求緊張が高いとし, 負荷量の大きさを示すために!の記号がつけられる。

なお, 8つの衝動因子は次のような衝動欲求を示しているのである。

h因子 : 女性的, 母性的, 受動的。

s因子 : 男性的, 父性的, 攻撃的。

e因子 : 倫理性, 激情, 粗野な感情。

hy因子 : 自己顕示, 露出, 自己主張。

k因子 : 自己満足, 自我収縮, 実利主義。

p因子 : 自我拡大, 精神的自我。

d因子 : 客体の獲得, 肛門的傾向

m因子 : 客体への執着, 依頼心, 口唇的傾向。

そこで, 各職種別に因子の4選択反応をみると表12のようになる。

機械科は, h因子を＋反応 (50%) に, s因子を－反応 (54%) に, hy因子を－反応 (76%) に, p因子を－反応 (50%) に, m因子を＋反応 (76%) にそれぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

電気科は, h因子を＋反応 (54%) に, hy因子を－反応 (56%) に, m因子を＋反応 (72%) に, それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

運輸装置科は, hy因子を－反応 (64%) に, k因子を－反応 (60%) に, p因子を＋反応 (76%) に, m因子を＋反応 (88%) に, それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

板金溶接科は, hy因子を－反応 (68%) に, k因子を－反応 (72%) に, p因子を＋反応 (56%) に, m因子を＋反応 (84%) に, それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

鋳造鍛造科は, hy因子を－反応 (70%) に, k因子を－反応 (55%) に, m因子を＋反応 (85%) に, それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

木工建築科は, hy因子を－反応 (64%) に, p因子を＋反応 (56%) に, m因子を＋反応 (72%) に, d因子を0反応 (60%) に, それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

塗装科は, s因子を－反応 (56%) に, hy因子を－反

表 13 機 械 料 の 選 択 反 応

(N=50)

(好きと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		12	6	2	11	12	11	45
s	12		4	2	6	8	3	11
e	6	4		17	11	8	2	8
hy	2	2	17		7	3	15	1
k	11	6	11	7		15	12	7
p	12	8	8	3	15		34	6
d	11	3	2	15	12	34		21
m	45	11	8	1	7	6	21	
Σ	99	46	56	38	54	90	67	150

(嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		9	3	9	13	4	7	8
s	9		16	21	36	7	0	12
e	3	16		30	6	8	8	3
hy	9	21	30		28	17	17	7
k	13	36	6	28		5	11	4
p	4	7	8	17	5		4	4
d	7	0	8	17	11	4		3
m	8	12	3	7	4	4	3	
Σ	53	101	74	129	103	49	50	41

表 14 電 気 料 の 選 択 反 応

(N=50)

(好きと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		10	10	6	15	14	13	34
s	10		6	2	4	5	9	19
e	10	6		14	5	19	5	17
hy	6	2	14		3	11	6	12
k	15	4	5	3		5	7	12
p	14	5	19	11	5		5	24
d	13	9	5	6	7	5		8
m	34	19	17	12	12	24	8	
Σ	102	55	76	54	51	83	53	126

(嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		12	7	10	8	0	8	12
s	12		17	25	30	7	7	6
e	7	17		22	13	11	6	3
hy	10	25	22		26	14	13	12
k	8	30	13	26		5	13	3
p	0	7	11	14	5		4	3
d	8	7	6	13	13	4		3
m	12	6	3	12	3	3	3	
Σ	57	104	79	122	98	44	54	42

応(64%)に、k 因子を－反応に、m 因子を＋反応 (92%) に、それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

機械の熟練者は、h 因子を＋反応 (67%) に、e 因子を－反応 (50%) に、hy 因子を±反応 (50%) に、k 因子を 0 反応 (67%) に、m 因子を＋反応 (66%) にそれぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

電気の熟練技術者は、hy 因子を－反応 (72%) に、k 因子を－反応 (64%) に、m 因子を＋反応 (84%) に、それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

木工の熟練者は、h 因子を＋反応 (66%) に、hy 因子を－反応 (72%) に、m 因子を＋反応 (72%) に、

それぞれ多くの反応を示す傾向がみられる。

各科共通して反応の多い因子は、＋m 因子と－hy 因子であり、これは平均衝動プロフィールの面からみた結果と同じである、0 d 因子は、各科とも45～50%前後の反応率ではあるが、比較的共通した反応のように思われる。一般に、±反応および0 反応の反応率は比較的低いようである。

職種別に、比較的特徴的の反応とみられるものをあげると、機械科は、＋h、－s 因子に、電気科は、＋h ±e、0 p 因子に、運輸装置科は、－h、＋p 因子に、板金溶接科は、－k 因子に、木工建築科は、0 k、0 d

表 15 運 輸 装 置 料 の 選 択 反 応 (N=25)
(好きと選択したもの) (嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		0	1	1	3	5	5	16
s	0		4	0	3	11	1	12
e	1	4		7	1	7	4	8
hy	1	0	7		2	7	3	6
k	3	3	1	2		1	4	4
p	5	11	7	7	1		2	24
d	5	1	4	3	4	2		8
m	16	12	8	6	4	24	7	
Σ	31	31	32	26	18	57	27	78

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		6	4	8	2	2	6	5
s	6		8	13	16	9	3	5
e	4	8		13	4	2	2	0
hy	8	13	13		13	3	4	3
k	2	16	4	13		0	11	3
p	2	9	2	3	0		4	0
d	6	3	2	4	11	4		1
m	5	5	0	3	3	0	1	
Σ	33	60	33	57	49	20	31	17

表 16 板 金 溶 接 料 の 選 択 反 応 (N=25)
(好きと選択したもの) (嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		2	3	3	3	5	4	17
s	2		3	2	4	4	4	13
e	3	3		5	1	11	5	6
hy	3	2	5		0	7	1	4
k	3	4	1	0		4	5	10
p	5	4	11	7	4		1	13
d	4	4	5	1	5	1		6
m	17	13	6	4	10	17	6	
Σ	37	32	34	22	27	49	26	73

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		3	1	5	6	2	5	1
s	3		6	7	13	7	3	2
e	1	6		11	6	8	1	0
hy	5	7	11		20	6	8	6
k	6	13	6	20		4	11	4
p	2	7	8	6	4		3	0
d	5	3	1	8	11	3		1
m	1	2	0	6	4	0	1	
Σ	23	41	33	63	64	30	32	14

因子に、塗装科は、-s, 0 e 因子にそれぞれ特徴的な反応がみられる。鋳造鍛造科は特に特徴的な反応としてあげるものはみられない。

〔3〕 因子分析からみた結果

各組の写真選択 (好き・嫌い) の組み合わせをまとめて表わすと第13表～第19表のようになる。この組み合わせにおける好きな写真の最多数は、機械科、h-m。電気科 h-m, 運輸装置科 p-m, 板金溶接科 h-m と p-m, 鋳造鍛造科 p-m, 木工建築科、h-m, 塗装科 h-m の組み合わせである。嫌いな写真の最多数は、機械科 s-k, 電気科 s-k, 運輸装置科 s-k, 板金溶接科 hy-k, 鋳造鍛造科 s-k 木工

建築科 e-hy, 塗装科 s-hy の組み合わせである。

これらの選択反応から、選択比率を求め、好きな写真・嫌いな写真別にそれぞれ、セントロイド法を用いて因子分析を行なった。結果は表 20 に示すとおりで、因子は各職種とも第 2 因子まで抽出した。

この因子行列から各職種の抽出された因子についてみると、次のようになる。

機械科の第 1 因子は、+m 因子 (.944), +h 因子 (.729), +p 因子 (.628) : -h 因子 (.799), -k 因子 (.698), -s 因子 (.688) に関係のあるものであり、第 2 因子は、+h 因子 (-.387), +hy 因子 (.376), +p 因子 (.345) : -s 因子 (.424), -hy

表 17 鑄 造 鍛 造 科 の 選 択 反 応 (N=20)
(好きと選択したもの) (嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		3	5	2	8	4	3	11
s	3		2	1	3	2	5	6
e	5	2		6	2	6	0	6
hy	2	1	6		2	3	0	7
k	8	3	2	2		2	1	7
p	4	2	6	3	2		2	13
d	3	5	0	0	1	2		8
m	11	6	6	7	7	13	8	
Σ	36	22	27	21	25	32	19	58

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		1	3	6	2	1	1	3
s	1		5	9	14	5	4	5
e	3	5		6	6	4	3	0
hy	6	9	6		13	7	8	3
k	2	14	6	13		2	5	1
p	1	5	4	7	2		0	0
d	1	4	3	8	5	0		3
m	3	5	0	3	1	0	3	
Σ	17	43	27	52	43	19	24	15

表 18 木 工 建 築 料 の 選 択 反 応 (N=25)
(好きと選択したもの) (嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		3	6	4	2	6	8	14
s	3		2	1	4	10	4	13
e	6	2		6	0	5	3	9
hy	4	1	6		2	7	1	4
k	2	4	0	2		3	4	10
p	6	10	5	7	3		2	11
d	8	4	3	1	4	2		6
m	14	13	9	4	10	11	6	
Σ	43	37	31	25	25	44	28	67

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		6	4	9	7	2	3	4
s	6		9	13	10	4	4	1
e	4	9		16	6	1	3	1
hy	9	13	16		15	7	3	4
k	7	10	6	15		3	3	6
p	2	4	1	7	3		0	1
d	3	4	3	3	3	0		5
m	4	1	1	6	4	1	5	
Σ	35	47	40	69	48	18	21	22

因子 (- .394), - e 因子 (- .372) に関係のあるものである。

電気科の第1因子は, +m因子 (.8.14), +h因子 (.692), +p因子 (.545) : -hy因子 (.713), -s因子 (.698), -k因子 (.615) に関係のあるものであり, 第2因子は, +e因子 (.375), +h因子 (- .333), -p因子 (.312) : -k因子 (- .413), -p因子 (.296), hy因子 (.262) に関係のあるものである。

運輸装置科の第1因子は, +m因子 (.999), +p因子 (.810), h因子 (.470) : -s因子 (.769), -h因子 (.708), -k因子 (.657) に関係のあるものであり, 第2因子は, +m因子 (.531), +p因子 (.437), +s

因子 (.384) : -e因子 (- .314), -k因子 (.309), -h因子 (- .289) に関係のあるものである。

板金溶接科の第1因子は, +m因子 (.902), +p因子 (.662), +h因子 (.541) +k因子 (.845) -hy因子 (.835) -s因子 (.543) に関係のあるものであり, 第2因子は, +p因子 (.407) +e因子 (.3.75), +m因子 (- .324) : -p因子 (.388), -e因子 (.348) に関係のあるものである。

鑄造鍛造科の第1因子は, +m因子 (.899), +h因子 (.595), +p因子 (.560) : -h因子 (.821), -s因子 (.720), -k因子 (.720) に関係のあるものであり, 第2因子は, +m因子 (.376), +d因子

表 19 塗 装 料 の 選 択 反 応

(N=25)

(好きと選択したもの)

(嫌いと選択したもの)

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		4	3	3	1	8	7	20
s	4		1	4	1	5	1	10
e	3	1		6	2	9	7	7
hy	3	4	6		0	2	2	7
k	1	1	2	0		3	1	9
p	8	5	9	2	3		4	17
d	7	1	7	2	1	4		6
m	20	10	7	7	9	17	6	
Σ	46	26	35	24	17	48	28	76

	h	s	e	hy	k	p	d	m
h		2	2	6	6	0	7	3
s	2		7	15	10	7	4	5
e	2	7		10	6	4	3	1
hy	6	15	10		11	9	9	4
k	6	10	6	11		4	7	2
p	0	7	4	9	4		3	2
d	7	4	3	9	7	3		1
m	3	5	1	4	2	2	1	
Σ	26	50	33	64	46	29	34	18

表 20 職 種 別 因 子 負 荷 量

		機 械		電 気		運輸装置		板金溶接		鑄造鍛造		木工建築		塗 装	
		第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子
+	h	.729	-.387	.692	-.333	.470	-.094	.541	-.208	.595	.216	.580	-.273	.661	.221
	s	.294	.401	.377	-.198	.430	-.384	.451	-.181	.354	-.180	.509	.402	.360	.221
	e	.296	.170	.483	.375	.400	-.112	.451	.375	.418	.222	.407	-.239	.441	-.662
	hy	.268	.763	.346	.297	.315	-.210	.290	.287	.354	.186	.326	-.340	.310	-.103
	k	.349	-.149	.336	-.156	.220	-.165	.371	-.241	.418	.222	.356	.206	.260	.138
	p	.628	.345	.545	.312	.810	-.437	.662	.407	.570	-.186	.560	.316	.651	-.072
	d	.445	-.175	.336	-.130	.350	-.308	.321	-.134	.342	-.345	.366	-.144	.350	-.179
	m	.944	-.299	.814	-.115	.999	.531	.902	-.324	.899	-.376	.824	.177	.961	.354
-	h	.332	.156	.359	-.105	.415	-.278	.292	-.126	.291	-.260	.446	.155	.338	.305
	s	.688	.424	.698	-.238	.769	.192	.543	.247	.720	.384	.608	-.190	.666	-.323
	e	.522	-.372	.526	.186	.465	-.314	.443	.348	.417	-.192	.567	-.322	.440	.182
	hy	.799	-.394	.713	.262	.708	-.289	.835	-.217	.821	-.175	.861	-.270	.809	-.100
	k	.698	.342	.615	-.413	.657	.309	.845	-.252	.720	.215	.673	.121	.584	.152
	p	.332	-.264	.302	.296	.293	.263	.382	.388	.329	-.322	.253	-.126	.389	-.264
	d	.337	-.216	.349	-.116	.425	.228	.432	-.257	.404	.113	.263	.236	.440	.264
	m	.266	.139	.281	.093	.222	-.101	-.201	-.151	.253	.102	.284	.310	.236	-.117

(- .345), -s 因子 (.384)・-p 因子 (-.322), に関係のあるものである。

木工建築科の第1因子は, +m 因子 (.824), +h 因子 (.580), +p 因子 (.560): -hy 因子 (.861), -k 因子 (.673), -s 因子 (.608) に関係のあるものであり, 第2因子は +s 因子 (.402), +hy 因子 (-.340), +p 因子 (.316): -e 因子 (-.322), -m 因子 (.310) に関係のあるものである。

塗装科の第1因子は, +m 因子 (.961), +h 因子 (.661): +p 因子 (.651): -hy 因子 (.809), -s 因子 (.666), -k 因子 (.584) に関係のあるものであり, 第2因子は, +e 因子 (-.662), +m 因子 (.354)・-s 因子 (-.323), -h 因子 (.305) に関係があるものである。

以上のような負荷している因子から, 写真選択の要因を, 次のように解釈することができる。

第1因子は, すべての職種に, +h, +p, +m, -s, -hy, -k の各因子負荷量が高く, 共通している。このことは, 写真選択に際して, ソンディの主張する無意識な衝動因子のほかに, 写真に対する表面的な印象が大きく働き, 共通した傾向としてあらわれたのではないと思われる。

好きな写真から受ける印象を検討すると, 因子の写真は, 同性愛患者の顔写真であり, p 因子の写真は妄想病, m 因子の写真は躁病患者の顔写真である。これらの写真が共通して持っている特徴は, 「美しい表情」「深みのある表情」「やさしさ」など, なにか人をひきつけるような, 受動的, 母性的な傾向がある。

嫌いな写真から受ける印象を検討すると, s 因子の写真はサディズムの顔であり, hy 因子はヒステリー患者, k 因子は緊張型の分裂病者の顔写真である。これらの写真から受ける感じは, 「ゆがんだ表情」「グロテスクな表情」「愛想の悪さ」など, 攻撃的で愛想の悪い傾向がある。

したがって, 第1因子が意味する写真選択の要因は「深みのある美しさ」のある人物写真を好み, 「攻撃的で愛想の悪さ」のある人物写真を嫌う傾向にあり, 各職種とも共通している。

第2因子は, 各職種で特徴ある反応を示しており, 一概に解釈できない。第2因子は総合的考察のところでは検討する。

第1因子の因子負荷量とソンディの因子レベルとを関係づけると次のような欲求傾向が示される。

母性愛, 個人的な感覚的情愛への傾向。化粧する欲求。(+h):, 燃える情熱, 自我拡大, 権力把握, 他

人非難の傾向, (+p): 快楽主義。ふるい対象(事物・人間)に執着する傾向。(-s): 寛大, 文明化, 自己犠牲的傾向, (-s): 遠慮的傾向, 臆病, かくれたい欲求, (-hy): 自己抑制, 集団生活への適応-k などである。

〔4〕 総合的考察

以上の結果を総合して, 各職種の衝動因子反応特徴を, ソンディの因子レベルから解釈すると次のようになる。

機械科は自己顕示, 自己主張, 受動的, 気をまわしやすい, 神経質などの衝動傾向がある。

電気科は, 熱狂的, 自我拡大, 自己伸展, 献身的, おくゆかしい, 度胸がないなどの衝動傾向がある。

運輸装置科は, 攻撃的, 自我拡大, 獲得した対象に執着, 気にしやすい, 細かいところに気をくばるなどの衝動傾向がある。

板金溶接科は, 爆発的, 自己伸展, 他人非難, いつも自分の行動にブレーキをかけているなどの衝動傾向がある。

鋳造鍛造科は, 自己犠牲的, 所有獲得への欲求, 依存的などの衝動傾向がある。

木工建築科は, 攻撃的, 燃える情熱, 孤独, 気をまわすなどの衝動傾向がある。

塗装科は快楽主義, ふるい対象に執着する傾向。受動的, 気をまわすなどの衝動傾向がある。

5. む す び

ソンディの理論をもとに, 職種別に衝動傾向を明らかにしてみた。第1因子は各職種に共通したものであり, 第2因子は各職種別の特徴をみることができた。しかし, 被験者が学生であり, 今後社会に出てから, 必ずしも現在の専攻方面の職業につくとは限らない。すなわち, 現在の専攻学科に所属はしていても, 成績優秀でその職種にむくものと, そうではないものとがまじっているわけである。このように現在分析した被験者は, 必ずしもその職種の代表者とはいきれないのである。したがって, ここに表わされた結果も絶対的であるとはいえないのである。しかし, 各職種別になんらかの特徴ある衝動構造があることはみいだされた。今後, 職業適性という解釈の面において, このソンディ・テストを妥当性, 信頼性のあるノルムを作りたいと思うものである。

最後に, 本研究の資料収集にあたってご協力くださいました, 指導科の藤田先生, 手塚先生に心から感謝致します。